

をテーマにして、「ベル ジェバンス クリニックサロン」を経営しております。私が、自分の仕事で最も誇りとしている「弱酸性美容」を、私のこの手で里村の母の髪にしてあげることができたならばどんなに幸せな事か、と思うとき……。戦争のない平和を心から願うものです。

三角山に眠る里村の両親は、今でも私を見守ってくれていることだろうと思う毎日です。私の人生を、豊かに幸せへと導いてくれた馬場の養父母から徳をたくさん与えられた私は、最高の幸せ者です。感謝の気持ちで毎日過ごす昨今です。

里村から、馬場の姓に変わるまでの少女時代、朝鮮で敗戦を迎え、悲しく恐ろしく怖く、そして悲惨な地獄をいろいろと見てきました。その体験を、戦争の実態を知らない人たちに伝えておきたい、との一念からペンを執りました。

ひとつの記録

群馬県 武藤 あい子

私のルーツは、群馬県群馬郡群馬町北原にありますが。その群馬町から一族が東京へと移り、京城（ソウル）を終焉の地と決めた経緯は、子供だった私にはよく分かりませんが、記録に残っていることをまとめてみると……。

父の長兄は、満州大連で事業を起こし、成功して京城に膨大な土地を求め、私の父と祖父とを内地から呼び寄せたとのことです。

京城郊外の西江という所に私が行ったのは二歳のとき、昭和七（一九三二）年のことでした。

伯父は、養鶏、果樹園と他に見渡す限りの田園を持ち、大勢の朝鮮人を使っており、父はその人たちの先頭に立って指導・監督をしていたようです。

伯父は晴耕雨読、祖父は孫である私をかわいが

る係のように野山に連れ出し、自然の摂理から読み書き算盤に至るまで教えてくれる毎日でした。

祖父は毎年、恩師内村鑑三先生のご命日の記念会に出席のため、内地に帰るのを楽しみにしていました。昭和十年に内地に帰り、記念会に出席のあとと体調を崩し、そのまま京城に戻ることなく翌十一年に亡くなりました。

それからの戦争中のことは省き、終戦の日の翌日八月十六日のことから書いてみたいと思います。

終戦の詔勅の下りた次の日の朝、母が「今日は学校に行かないで」と言いました。当時父は召集されて、母が家を守っていました。私は、不安そうな母の言葉に背いて学校へ行きました。どうしても行かなければならないと思ったわけがあったのです。朝鮮に住んでいる日本人は私を含め、終戦の意味も、これからどうしなければならぬかということも、全く分かっていなかったのです。

そのころの女学生は、勤労働員で軍需工場に行っていました。三年生は順にクラスだけ残って、

軍から支給される塩飴入りの大福餅を数えて、各工場に配達するという仕事がありました。でも八月十六日には、そのことだけではなくもつと大事な仕事があったのです。

八月九日に、ソ連が日ソ中立条約を破って満州へ攻め入って来ました。そのため、一般の住民が満州から南下して北朝鮮に入り、避難列車で十六日の朝、京城駅に着くことになっていました。そして、私の学校がその収容場所になっていました。残っていた三年生がそのお世話をすることになって、私はその責任者でした。十五日、玉音放送を聞いたあと、プールをきれいに洗って水を張って帰宅しました。十六日の朝、汽車通学の私が京城駅に降りたとき、ちょうど避難列車も着いたところで、駅はごった返していました。学校では空き教室や講堂に落ち着いてもらい、長時間の汗や汚れを流すためプールに入り、私たちも水着になってお世話していました。そのうちに、遠くから怒濤のような歓声とも喚声ともつかないうねりが、

だんだんに押し寄せてきました。正午に近いころでした。先生の指図で、大急ぎで身支度を整えて集合した私たちに、「朝鮮人が暴動を起こした。これからすぐに帰宅する」と言われて、方面別に先生一人が付き添いました。今思えば、それは決して暴動などではなく、韓国の独立の宣言であり、解放の喜びの集会であったのです。でも、絶対という名のもとに教え込まれた知識では、「大変理不尽なこと」として、恐怖のどん底に落とし込まれた気分で震えていました。南大門に集合した群衆は、朝鮮総督府に向かって雪崩のように押し寄せます。その道筋にある私たちの学校は、門を閉ざして群衆の行き過ぎるのを待ちました。でも、いつになっても途切れることはありませんでした。様子うかがいながら生徒たちは、裏門から横門から少しずつ帰り始め、残ったのは汽車通学の五、六人だけになってしまいました。本郷先生という体育の先生が付いていて下さいました。まだ配っていないかった大福餅を、持てるだけ持たされまし

た。

校門の外に出て目にした状況は、今でも忘れることはできません。狂気乱舞している群衆は、手に韓国の国旗を持っていました。一夜のうちにこれだけの数の国旗が揃うということ、複雑な意匠の国旗が既にでき上がっていたということ、いかに世間知らずの私でも「これはただごとではないぞ」と思いました。群衆の動きと逆行する私たちは、道の端の建物に背中をつけて横に横に進みました。行き交う人々に唾をかけられ、殴りかけられ、抱きすくめられ、一時間以上かけてやっと京城駅まで行きました。でも、駅は占領されていました。建物の屋根の上も、機関車の上にも韓国の旗が翻っていました。私たちの乗れる汽車はなかったのです。先生が「私の家に行こう」と路地から路地へと走り、やつこのことで先生のお宅に着きました。それまで、悲鳴をあげるな、泣くな、毅然としている、との注意を必死で守ってきた緊張が解けて、皆で泣きました。

先生の指示で、奥様と私たちは大福餅を油で揚げました。日持ちするようにです。先生はどこかに出て行かれました。しばらくして戻られた先生は、事態の説明を下さいました。それでも、まだどれくらい切迫しているのか、ピンときませんでした。そして最後に「どんなことがあっても、君たちのことは守る。内地までは絶対に連れて帰るから」と言われたとき、初めて自分の置かれた立場が分かりました。家族と会えないまま、内地までどうやって帰るのだろう。内地に着いてから、どこへ行けばいいのだろう。小さな頭の中で、大きな困惑がぐるぐる渦を巻いていました。私たちは、揚げた大福を食料として持ち、お金をいくばくか持たされ、いつでも発てるように準備してじっとしていました。

そのうち、憲兵が来て竜山駅から最後の汽車が出るというのです。さつき外出なさった先生は、近くの憲兵隊に行き、竜山駅から汽車が出るか調べて欲しいと頼んで来られたのです。竜山駅は、

東京における上野のような重要な駅です。憲兵のサイドカーに乗せられて、三人が竜山駅に向かいました。あとの人は、その汽車では家に帰れなかったのです。

竜山駅に着くと汽車は既に満員、窓にも屋根にも人がぶら下がっていました。私たちは、窓から入ってもらって発車を待ちました。汽車だけは確保できても、シグナル操作やポイントの入れ替えなどは占領されていて、交渉が難航したようです。やっと汽車が動き出したときは、思わず泣きました。長い間の屈辱に耐えた、民族の独立の場に立ち会った貴重な体験ではあったものの、女学校三年生にとっては、死に直面したように感じられた、恐怖の八月十六日だったのです。

この終戦の日の三カ月前、五月に父は四十一歳で召集されて、どこに居るのか分かりませんでした。このころ父は、父の兄と一緒に養鶏などたくさんさんの朝鮮人を使っていたことは、前に述べました。その伯父は温和な人で、その人たちを大切に

してましたから、終戦によって逆転した世の中になっても、私たちは朝鮮の人たちに守られていました。

父が「逃げて来た」と言って帰って来たのは、九月になってからでした。今のピョンヤンにいた軍隊は、北行きの列車に捕虜として乗せられたのだそうです。父はすぐに飛び降りて、夜になると線路を南へ南へと走り続け、運良く南へ走る貨物列車の連結部に隠れて帰って来たのです。終戦直後で、三十八度線の警備はまだ易しかったのかもしれない。逃げて来た」と言うので、すぐ後ろからだれかが追いかけて来るような気がして何日も恐ろしく、「どこかへ逃げよう」と、私は言い続けました。

そのうち朝起きると、顔見知りの日本人が殺されたという話があり、だんだんとあの人もこの人もというように広がっていき、私たちも市街地の方へ引越すことになりました。伯父と父は、働いていた人たちに土地を分け、後々問題にならない

いようにそれぞれ登記書類を作って与えました。

これには後日談があります。昭和六十年にクラス会でソウルに行つて、みんなが自分の住んでいた家を探したことがあります。私の家は、周りの畑や田圃など何もなく家がぎっしり建っていて、何が何だか分かりませんでした。地形から判断して、「ここ」と見当をつけた坂を下った所に、「ここは昔、東橋町四十六番地だった所です」と、門柱にプレートがはめ込んでありました。私が育った所番地です。伯父や父の志が、そこに生きていると思えました。略奪して手に入れた土地ではないと、胸を張って生きてきた人の魂が、そのプレートに宿っているようでした。声も掛けずに帰って来ましたが、報告したい伯父も父も既に亡くなっていました。それはそれとして、私たちは市街地に移りましたが、毎日のように野菜が届き、引揚げの日には日持ちのする朝鮮餅をたくさん持って、荷車を曳いて竜山駅まで見送りに来てくれました。今、ぎくしゃくとしている韓国とのことを

考えると、「どうしてなの？ 私には良い想い出しかないのに」と、その白いプレートが目につかびます。

引揚げの順番は、父が毎日どこかへ行つて聞いて来ました。「駄目だった」と言つて帰つて来た何日かの後、「十月三十日に汽車に乗れるぞ」と、やつと内地へ帰ることが現実となりました。

竜山駅には、人があふれていました。割り当てられた列車がどれなのか分からぬままに、流れに乗つて前に前に進み、「これに乗れ」と言われて乗つたのは、馬匹車両で軍用馬を運ぶ列車でした。高い所に窓が両側に五つぐらいあつたと思います。後はガラんとした床だけ。馬糞の匂い、獣の匂いの車両の床にリュックサックや荷物を置き、その上にみんな座りました。でも、乗りたい人がいっぱい「まだ乗れる」「詰めて下さい」と、どんどん上へ上へと荷物が重なり、人は天井に頭が付くまでいっぱいになりました。初めに乗った人の荷物は下の方に埋もれて、手に持っていたものだけ

が頼りでした。たつた一つの戸を開めると、中は真つ暗。わずかにある小さな窓から、明かりと空気が入ってくるだけでした。でもまたそのときは、京城から釜山までなら一日我慢すればいい、とだれもが思っていました。

ところが、動き出した列車は一時間走つては止まり、二時間走つては止まり、そのたびに列車の何両目からか切り離されているのです。そのたびにみんなでお金を集めて、機関士に渡して車両を繋いでもらつて走り出すのです。列車が止まるとみんな飛び降りて、どこでも構わず用を足します。列車から遠く離れると、いつ発車するか分からないので、不安で遠くへは行けなかつたのです。

三日目ごろから、人いきれと排泄物の匂いで息をするのも苦しくなつてきて、とうとう妹が呼吸困難になりました。父は「この列車から降りよう」と言いました。でも、全財産の荷物は一番下積みになつていて、置いて行くわけにもいきません。どうやって運んだのか詳細は覚えていませんが、

妹は一番後ろの軍医が乗っている車両に運ばれました。座席のある普通車両で手当てを受け、良い空気を吸って幾分元気になりました。母が付き添い、そのままそこで寝かせてもらうことができませんでした。

京城を出発して十日目、やっと釜山に着きました。収容所になっていた東本願寺に行きましたが、もう満員で入れないというのです。病人の妹に免じて、ご本尊様の囲いの中にやっと寝かせてもらいました。安どしたような微笑みを残して、間もなく妹は心臓麻痺で亡くなりました。たった十二年の生涯でした。

父も母も腑抜けのようになり、この妹をどうするのかも考えられない状態でした。私は、長女として「しっかりとしなければ」と十五歳の知恵を必死に絞り出していました。「とにかく妹の亡骸をこのままにはしておけない。どうしよう、どうしよう」と思い、ここはお寺だからお坊さんがおいでになるだろう、と考えつきました。でも、もう

日本に引き揚げてしまつて、おいでになりませんでした。困り果てた私は、「朝鮮人に頼んで埋めてもらおうかな」とぼんやり思い、お寺の門の所に茫然自失の体で立っていました。声を掛けられ、ふと気がつくときと私と同年配の朝鮮の少年がいました。目鼻立ちのきりつとしたその子を私は信じようと思ひ、妹のことを詳しく話しました。そして、そのころ、まだ土葬のお墓があちこちにありましたので、どこかに埋めることはできないかと聞いてみました。少年は「待つてて」と言つて走り去り、お父さんを連れて来てくれました。お金が出るなら、火葬場があるからそこへ連れて行ってやる、と言つのです。私は父と母に会つてもらひ、話ほうまくまとまりました。その人は荷車を持つて来て、少年と二人で妹を運んで行きました。

引揚げの日本人は、一人千円だけ持つて帰ることができました。そしてみんなは考えられるだけ考へて、あらゆる持ち物に隠せるだけ隠して日本円を持つていました。だから、妹が公然と持つこ

とができた千円は、妹のために使おうということになったのです。そのうちの五百円を火葬場の費用に渡し、残りはお骨を受け取ってからと、父は交渉しようです。当時の千円は、魅力ある金額だったと思います。

長い長い疑心暗鬼の三日間が過ぎて、やっと妹のお骨が帰って来ました。小さい白木の箱に、骨がちやんと入っていました。白の繻子しゅうすの覆いで蓋をされ、心のこもった立派なものでした。少年は、お花を添えて手を合わせて下さいました。

そのときからずっと今でも、その少年は神様のお使いのように現れたと思っっています。あの混乱した釜山の街で、妹をそのまま置き去りにしても仕方のない状況だったのに、善意の人に巡り会えて本当に幸運でした。

その後、一週間ほど埠頭のコンクリートに寝起きして、内地への船に乗る順番を待ったのです。野宿をしたのが何日間だったのか、妹を亡くしたことで打ちひしがれて、人の流れのままに行動し

ていたように思います。船が出るたびに、少しずつ桟橋に向かって移動していました。船の大きさで、何人乗れるか分かりません。大きな船が出て、人の塊がぐっと減ると、「次の船に乗れるかな」と淡い期待を抱き、待つのです。

乗船前には、アメリカ兵の身体検査がありました。お金は一人千円だけ、隠していたお金が見付かると没収です。妹のお骨も蓋を開けさせられませんでした。十字を切って祈る仕草のアメリカ兵に、思わず「サンキュー」とお辞儀をした私に「行け、行け」と手で合図をして、検査は簡単に終わりました。思いがけない出来事に、アメリカ人の人間性をふと感じたひとときでした。

やっと乗船できたのは、アメリカ軍の上陸用舟艇で、船底に詰め込まれました。玄界灘の荒波に揺れ続け、真つ暗な所で一睡もできずに過ごしていると、「内地が見えたぞ」と大きな声がしてきて、酔いも眠気も振り切って甲板に走りまわりました。遠くの方に向つすらと陸地が見え、着いた所は博多で

した。

引揚証明書を交付される行列も、検疫を受ける行列も、長い長いものでした。でも、車両を繋ぎ繋ぎ時間の読めない不安の連続を過ごしてきた身には、行列の先が見えることは長いとは感じませんでした。

博多駅から乗った列車は、今度は無蓋貨車でした。端っこの角の所にリュックサックの荷物を置いて、弟、妹が飛ばされないように気を配っていました。気がついたら、大事な大事な財産のリュックサックが一個、いつの間にか無くなっていました。引揚者の自分が一番惨めな存在だと思っていた私は、もつともつと大変な生活をしている人が大勢いることに、まだ気がついていませんでした。

父の本籍地群馬町には、頼れる人はだれもないので、ひとまず母の姉を頼り、群馬県新田郡世良田村三ツ木という所に仮の住まいを決めました。とは言うものの、住まいというにはほど遠い、廃

墟の古い寺でした。古寺での生活は、隙間風と月も星も見える屋根からの風雨、夏は猛烈な蚤。でも伯母や村の人々の好意で、一人一枚の布団と茶碗・鍋など、最低の生活はできました。

そして迎えた昭和二十一年のお正月は、何にも無いお正月でした。でも、まだそのころは隠し持つて来た日本円が使えました。やがて新円が発行になり、銀行は封鎖され、何でも買わなければならない我が家は、じりじりと貧困の生活へと落ちていったのです。

そんな中、父は、私を女学校へ転入させてくれました。学校では、出席日数が足りないから一年下の二年生にしか転入させられない、と言われれました。個人的な理由ではないのにどうしてと粘り、とうとう条件付きで許可されました。その条件とは、ちょうど期末試験のときだったので、それを受け合格点を取ること、ということでした。数学は代数でしたので、朝鮮の女学校で幾何を学んでいた私には、チンブンカンブン0点でした。他は

合格点に達し、入学は許可されました。しかし、さらにもう一つ、この後一日も欠席しないことという条件を付け足されました。栄養失調でもやけが崩れ、毎日水が溜まって歩けない足を引きずって、とうとう三月まで頑張って進級することができました。

終戦から引揚げまでの、忘れたいけれど忘れてはいけない一つの記録です。

北朝鮮脱出記

神奈川県 内藤 毅

祖国日本に、帰国の夢も叶わず

今なお北朝鮮の地に眠る、数万の

同胞の御霊に、この一文を捧げる

一 北朝鮮咸興の深夜の出来事

「ストーイ（止まれ）！」の声と同時に、私の胸元にソ連兵の尖った銃剣が突きつけられた。もう一人のソ連兵は、携帯している自動小銃の銃口を私に向けていた。ときは、昭和二十一（一九四六）年三月上旬、北朝鮮の咸鏡南道、咸興市盤竜台町で起きた出来事である。

そのころ私は、ソ連陸軍野戦三九三二病院で、日本人重傷患者の世話をしていた。当時、北朝鮮に抑留されていた在留邦人の惨状は、誠に筆舌に尽くし難いもので、だれもが信じられないような